

令和3年度 エトピリカ保護増殖検討会 議事概要

2021年11月30日（火）9:30～11:30

北海道釧路市幸町9-1

釧路市交流プラザさいわい 大ホール

【議事】

- (1) これまでの取組評価について
- (2) 令和4年度以降の取組案について
- (3) その他

【資料】

資料1 エトピリカ保護増殖事業におけるこれまでの取組について

資料2 令和4年度以降の取組（案）について

参考資料1 2021年ユルリモユルリ島周辺におけるエトピリカの生息状況（速報）

参考資料2 エトピリカ *Fratercula cirrhata* の世界的な生息状況

【出席者】

検討委員（五十音順、敬称略）

長 雄一	北海道立総合研究機構産業技術環境研究本部エネルギー・環境・地質研究所 研究主幹・自然環境部道東地区野生生物室長 (兼任)
風間 健太郎	早稲田大学人間科学学術院 准教授
澤邊 昭彦	浜中町教育委員会生涯学習課 課長
澁谷 辰生	厚岸水鳥観察館 主幹
外山 雅大	根室市歴史と自然の資料館 学芸員
綿貫 豊	北海道大学水産学部 教授

関係機関・関係者

井川 由唯	北海道釧路総合振興局保健環境部環境生活課 技師
浦田 順	北海道根室振興局保健環境部環境生活課 自然環境係長 (ご欠席)
岸 康申	北海道根室振興局保健環境部環境生活課 主事
成田 竜典	浜中漁業協同組合 指導部 指導課長
片岡 義廣	NPO 法人エトピリカ基金 理事長
福田 佳弘	知床海鳥研究会 代表
小谷 裕介	鳥獣保護区管理員 (ご欠席)

環境省釧路自然環境事務所

川越 久史	所長
七目木 修一	野生生物企画官
黒崎 浩史	生息地保護連携専門官
西澤 文華	自然保護官

事務局 (一般財団法人自然環境研究センター)

橋本 琢磨	主席研究員
中山 文仁	上席研究員
港 隆一	上席研究員
菅野 貴久	研究員
井上 奈津美	研究員

【議事】

(1) これまでの取組評価について (資料 1、参考資料 1、参考資料 2)

○PVA による絶滅確率の計算等、エトピリカ個体群の現状に関する解析について。

→PVA による根絶確率の算出は、海外事例などからパラメーターを得ることで可能である。現在の生息数であれば、すぐに絶滅するような結果が得られることになるだろう。値が独り歩きする可能性はあるものの、数値は示すべきである。

→これまでの個体数の年間減少率から、この値が続いた場合の結果を算出することは比較的容易である。ただし、値の妥当性については、考慮する必要がある。

→単なる PVA ではなく、現状からどのように回復するかといった解析を実施するべき。

○海水温変動の影響について

→今夏はどの海域でも表面海水温度が 5 度以上高かったため、餌資源に影響が出ている可能性がある。

→2016～2017 年の北米で年間を通じて海水温が高い状態が続いた結果、エトピリカの大量死が確認されている。様々な報告から、海水温の上昇により魚の栄養状態が低下したことが、大量死の主たる原因になったと推察されている。

○大型猛禽類による攪乱について

→オジロワシは海鳥を襲うことが上手な個体もいるため、エトピリカも襲われる可能性が高いと思う。

→オジロワシはウミウやオオセグロカモメに強い影響を与え、日中に行動するエトピリカにも影響があるのではないか。エトピリカに対して与える影響は大きくないのではないか、ただ全く襲わないということではなく、オジロワシがエトピリカのデコイに向かっていったことがある。

→海外ではハクトウワシが着地しているだけでエトピリカが帰巢できなくなる影響が報告されている。

○海外の個体群との関係について

→日本国内の個体群では、局所的な減少がここ 5 年くらいの個体数減少の要因である一方で、加入元であるロシアや北米の個体群が減少している影響も背景にあると思う。そういった視点も考慮してもらいたい。

○外来捕食者対策について

→海外事例から、外来ネズミ類はエトピリカに対してかなりの悪影響を与える要素であるという評価が定着している。ユルリ島・モユルリ島でのネズミ駆除により一つの大きな減少要因が取り除かれたという認識である。

(2) 令和 4 年度以降の取組案について (資料 2)

【①生息状況の把握】

- 生息数繁殖数のモニタリングは続けることが重要であるが、これまでは個体数の把握に注力しすぎてきたと思う。減少要因を特定するようなモニタリングについてももっとすべきであったと思う。
- モニタリングは重要だと思う。エトピリカ自体の生息状況の把握はもちろん重要だが、捕食者の生息状況や飛来状況、他の海鳥との関係性を明らかにすることを目的として、可能な範囲で他の海鳥のモニタリングも行い、生息地全体で海鳥の個体群の状況を把握できるようなデザインで調査すべき。
- 北方四島と情報共有をすることは絶対に必要である。
- 落石ネイチャークルーズの観察データを活用できると良い。
- データの不確実性があるものの、PVAを用いた絶滅確率の算出を行った方が良い。数値が独り歩きする心配はあるが、計算条件に関する説明を添えれば良いだろう。

【②外来捕食者対策】

- キツネが侵入したピリカ岩では、オオセグロカモメが全滅した。来年以降もその個体が生きている限り侵入する可能性があるが、特定して駆除することも難しい。以前ユルリ島にキツネが侵入した際は捕獲しており、技術的に捕獲することは可能だが、ピリカ岩は本土と行き来できるので容易ではない。
- 北方四島の生息状況に関する情報共有が必要である。

【③生息地の環境整備】

- 攪乱要因であるオジロワシを増やさない努力が必要ではないか。特に観光船や氷下漁から出る餌を減らす努力が必要である。
- オジロワシの追い払いは一つの現実的な対策かと思われる。エトピリカが活動する昼間に常時要員を配置することは、効果等について整理し検討する必要がある。
- オジロワシの捕獲に関しては、捕獲目的が合理的に設定できるかという点に加え、オジロワシの保護とエトピリカ保護のバランスをどのように考えるかが重要である。

【④デコイの設置等】

- 天売島でのウミガラスの事例と同様に、ユルリ島でも詳細な調査を通してデコイを設置する適地を見出す必要がある。また次の段階として、そういった繁殖適地に個体を誘引するための方法を考えなければいけない。

→現在の状況では、周辺に寄ってくる個体がほとんどいないので、デコイを設置しても効果は期待できないだろう。

【⑤人為的な個体の導入】

→海鳥に限らず保全生態学の分野では人為的導入の是非は様々議論されている。世界ではいくつかの種類で成功事例があるものの、いずれもかつて減少要因を可能な範囲で除去した上で再導入を行い成功している。減少要因が解消されなかった場合は導入した個体がすぐに死亡するといったことにもなりかねないため、現時点での再導入については性急と思われる。

→再導入をするしかないと思う。再導入の実現に向けた勉強を目的とした勉強会を立ち上げるべきだ。

→人為的な個体の導入について、どのような形で実施することが可能か、また対策として有効か検討しなければいけない。こういった形が考えられるのか検討したい。

【⑥混獲対策】

→地元との協力体制の構築が重要である。

→地域との意見交換会は、令和6年度と言わずもっと早く開催した方が良い。

【⑦地域との連携】

→エトピリカ保護増殖事業は、海鳥保全や海洋生態系保全のフラッグシップとして非常に重要な存在になりえる。SDGsにも海洋生態系保全が項目として入っており、この事業がモデルケースとなることを一つの目標にするとよい。

→定期的な意見交換の場の構築を進めるだけでなく、市民参加型モニタリングなど地域と連携した情報収集体制構築の提案まで目指せるとよい。その際、是非とも地元の市町村で開催するべき。

以上